様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８４０７３

研究課題名（和文）中国天文類書の継承と発展に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic study on succession and development of the Chinese astronomy Leishu

研究代表者
前原　あやの（MAEHARA, Ayano）

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：６０７３４２４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、『観象玩占』の諸テキストの実態を明らかにするとともに、データベースを公開し、中国の星座分類の変遷について明らかにすることができた。
　『観象玩占』宮内庁書陵部本について、『書物方日記』や『商舶載来書目』をもとに調査した結果、宝暦9年（1759）に舶載し、田沼意次がそれを入手して宝暦12年（1762）6月10日に紅葉山文庫に寄贈、その後、明治の世になって宮内庁図書陵（現在の宮内庁書陵部）へと移ったことがわかった。

研究成果の概要（英文）：By this study, I clarified the actual situation of texts of "観象玩占", showed a database, and was able to clarify it about the change of the Chinese constellation classification.
I investigated "観象玩占" of Imperial Household Archives based on "書物方日記" and "商舶載来書目".As a result, I clarified that reached Japan in 1759 and Okitsugu Tanuma obtained it and donated it to Momijiyama library on June 10, 1762 and finally it became the Meiji and moved to Imperial Household Archives.

研究分野：中国天文思想

キーワード：天文書　天文占　開元占経　観象玩占　天文要録

１．研究開始当初の背景

天文類書とは、歴代の書目において天文類に分類される文献の中で、類書的形式を持つものをいう。内容は主に宇宙論や天文占、五行占、風や雲気による占い、暦や星の基本的事項であり、各天文書から占辞等を収集し、項目ごとに並べている。出典となる天文書のほとんどが現存しないため、中国の天文学史を研究するには、この天文類書と歴代王朝の正史（中でも天文志）が主要な資料となる。しかし、天文類書は刊本や抄本がわずかに現存するものの、抄本ごとに文字や文の異同が多く、同じ書名でも内容が大きく異なる場合がある。そのため、一部の天文類書を除いては、来歴が明確でないために研究資料として用いられない状況にある。

近年、その状況を打破しようとする試みがある。『開元占経』に関しては、佐々木聡氏が現存の抄本・刊本を悉皆調査し、伝本状況を明らかにした（佐々木聡『『開元占経』閣本の資料と解説』東北アジア研究センター、2013）。また『天文要録』は前田育徳会尊経閣文庫と京都大学人文科学研究所に 26 巻分（もとは全 50 巻）の所蔵が確認されており、現在大東文化大学東洋研究所から訳注が順次刊行されている。『天地瑞祥志』については、水口幹記氏を中心とする研究会で訳注作りが進行中である。このように各天文類書の訳注や資料調査は少しずつ進められているものの、天文類書間の影響関係についてはまだ十分に検討されていない。内容をより詳細に比較・検証して天文類書の継承関係を明らかにする必要がある。

天文類書には内容の継承関係が認められるものの、個々の項目の配列を比較すると、各々の天文類書が異なる星座分類に基づくことがわかる。中国の星座の多くは地上の官職や建造物などの名称がつけられている。西洋とは大きく異なる星座体系を有し、その分類についても創意工夫された。星座の名称や分類を体系的に辿った研究は、大崎正次『中国の星座の歴史』（雄山閣、1987）がほぼ唯一のものであるが、大崎氏の分類は、星座分類の変遷を時代ごとに単線的に捉えており、正史や天文類書の性格の相違を考慮していない。また、大崎氏が扱った資料は限られており、より広い資料を用いた検証が必要である。

２．研究の目的

本研究は、中国天文学を研究する上で欠かせない天文類書の一部を電子テキスト化してデータベースを作成することで、天文類書間の内容の比較を容易にし、内容の継承関係、変遷過程を明らかにすることを目的とする。また、天文類書の整理と並行して、中国の星座分類の変遷過程を明らかにすることとする。

さらに作成したデータベースを公開することで、関連の研究者による資料の検索を可能にし、アプローチの幅を広げ、効率化を図り、これまで研究資料と見なされなかった天文類書をも研究に活用しうる土壌を作ることも目的の一つである。

３．研究の方法

本研究では、研究目的を達成するために、以下の①～③の方法を用いて研究を遂行する。

①『観象玩占』のテキスト調査
②『開元占経』、『観象玩占』、『天文要録』の電子テキスト化とデータベースの公開
③データベースを用いた天文類書の内容分析

４．研究成果

本研究により、『観象玩占』の諸テキストの実態を明らかにするとともに、データベースを公開し、星座分類の変遷について明らかにすることができた。以下、その成果を順に説明する。

⑴『観象玩占』の諸テキストの実態

『観象玩占』は唐の李淳風撰、あるいは明の劉基撰とされることが多いが、実際には後世の仮託と考えられており、撰者は不詳。成立年代の特定も難しいが、『開元占経』からの引用もあり、宋代頃の成立と考えられる。現在、『続修四庫全書』子部術数類に清華大学図書館蔵明抄本（50 巻本）の影印が収録されるほか、日本では宮内庁書陵部（以下、書陵部と略称）や東文研、人文研（49 巻本）、尊経閣文庫、蓬左文庫、慶應義塾聊斎文庫などにも所蔵される。このうち東文研本には劉基の序があり、蓬左文庫本ははじめに天文図があって、巻数の表記も大きく乱れている。また、慶應義塾聊斎文庫本は簡易の図を交え、『天元玉暦祥異賦』と共通する内容であり、他の『観象玩占』とは全く異なる。

抄本は中国国内にも数多く存在し、中でも中国・国家図書館、南京図書館には複数部所蔵される。そのほか『朝鮮史』第五編第八巻には、英祖 7 年（1731）10 月 4 日に「観象監、観象玩占ヲ印進ス」との記述が見られ、『観象玩占』は韓国にも伝わり観象監によって「印進」されたことがわかる 。この時のものかは定かではないが、朝鮮刊本は、韓国・国立中央図書館、ソウル大学中央図書館（奎章閣）のほか、アメリカ・ハーバード燕京研究所（ハーバード大学内）にも現存する。ハーバード燕京研究所には朝鮮本以外にも 3 部の明鈔本がある。

『観象玩占』のうち筆者が確認した続修四庫全書本、東文研本、人文研本、尊経閣文庫本、書陵部本について、特に目録や巻一の内容を比較すると、次のような相違がある。

続修四庫全書本と東文研本はともに全五十巻を甲集から癸集の十干に分類し、いずれも巻一に天と地に関する記述を載せるが、人文研本と尊経閣文庫本、書陵部本には十干の分類はなく、巻一には天に関する記述のみを載せる。他にもそれぞれに占辞の配列が異なる、内容に増減があるなどの相違がある。特に東文研本は、他のテキストと文の並びが異なる上に、細目が大変多い。改行位置なども含め、全体的にかなり整った姿を有する。これら相互の関係性については、今後より一層の調査、検討が必要である。

報告者が作成したデータベースでは、宮内庁書陵部所蔵の写本を使用した。書陵部の目録には「清人写」とあるが、嚴紹璗編著『日蔵漢籍善本書録』（中華書局、2007 年）には「明人紅格写本」とある。2 套、全 20 冊。各冊首に「秘閣図書之章」の印がある。

『書物方日記』や『商舶載来書目』（国立国会図書館蔵。大庭脩『江戸時代唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、1967 年に翻刻あり）をもとに調査した結果、宮内庁書陵部本は、宝暦 9 年（1759）に舶載し、田沼意次がそれを入手して宝暦 12 年（1762）6 月 10 日に紅葉山文庫に寄贈、その後、明治の世になって宮内庁図書陵（現在の宮内庁書陵部）へと移ったと推察した。

⑵データベースの公開

調査した天文類書をもとにテキストを選定し、「天文占書フルテキストデータベース」を作成・公開した（http://www.temmon.org）。これは、天文占書を電子テキスト化し、引用された天文書の書名、あるいは本文を検索可能にしたものである。

本データベースを利用することで、天文書それぞれの内容を収集・比較し、成立年代や場所の検討に基づき各々の特徴を明らかにすることが可能になる。無論、最終的には原書に当たらなければならないが、探索の手間を軽減することはできよう。また、天文占書間の類似の占辞を比較することで、天文占書相互の関係性についても検討することができる。

現在公開しているのは、『開元占経』（関西大学図書館内藤文庫所蔵の恒徳堂刊本。請求記号 L21**1*462－1～32）、『天文要録』（国立天文台本。番号 404）、『観象玩占』（宮内庁書陵部所本。函架番号 404・14）の三文献である。

⑶星座分類の変遷

中国の星座分類は、大きく分けて 4 つある。

1 つは、『史記』天官書や『漢書』天文志にみえる五宮の分類である。天の北極を中心とする区域を「中宮」、その周囲を四方に分けてそれぞれを「東宮」「南宮」「西宮」「北宮」と呼んだ。これは、その後の文献にあまり見られないことから、比較的早期の分類と見なすことができる。

2 つ目は、中宮、二十八舎（宿）、外官の分類である。これは、初唐の太史令である李淳風が用いた分類法で、李淳風が著わした『晋書』天文志、『隋書』天文志、『乙巳占』に見える 。五宮分類と同様、天の北極を中心とする中宮を規定し、その外縁にあたる天の赤道に沿って分布する二十八宿、そして二十八宿より天の南極側の星座を外官とする、3 重の区分である。

3 つ目は三垣・二十八宿の分類である。三垣とは紫微垣・太微垣・天市垣の 3 つの星座を中心とする区画で、北周の庾季才の『霊台秘苑』、隋の丹元子（唐・王希明ともされる）の「歩天歌」、『宋史』天文志などに見え、宋代以後広く用いられる。

4 つ目は三家分類である。三家とは、星座の名付け親とされる石氏（石申）・甘氏（甘徳）・巫咸のことで、それぞれが名付けたとされる星座ごとに配列したものを三家分類と呼ぶ。先の 3 種の星座分類がみな星座の位置にもとづくのに対し、三家は位置にもとづかない分類であり、それぞれに属する星座が星図上にばらばらに配置されるという特徴を有する。この三家分類は唐代の天文書『開元占経』などで用いられている。

これらは、二十八宿や中外官（天の赤道を基準に、北極側を中官、南極側を外官とする）の概念と相互に組み合わさることで成り立っている。

現在報告者は星座分類の変遷過程に関する論文を作成中であるため、詳しくは説明しないが、星座の位置にもとづく五宮・三垣等の分類と、三人の人物による星座を集成した三家分類とは、相互に関係しあいながらも大きな相違があり、星座の分類には大きく二つの流れがあったと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①<u>前原あやの</u>、天文占書の解題と「天文占書フルテキストテータベース」の意義、関西大学東西学術研究所紀要、査読有、第 49 輯、2016、pp.79-99

〔学会発表〕（計 3 件）

①<u>前原あやの</u>、『観象玩占』の東アジア的展開、平成 27 年度東西学術研究所第 9 回研究例会、2016 年 1 月 22 日、関西大学（大阪）

②<u>前原あやの</u>、中国天文学における五星、五帝と五行思想、東アジア怪異学会 第 98 回定例研究会、2015 年 4 月 19 日、園田学園女子大学（兵庫）

③<u>前原あやの</u>、三垣分類の形成と天市の位置づけ、日本中国学会　第 66 回大会、2014 年 10 月 11 日、大谷大学（京都）

④<u>前原あやの</u>、星座分類中の三家分類の位置づけ、平成 26 年度関西大学東西学術研究所

第 4 回研究例会、2014 年 9 月 5 日、関西大学（大阪）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
天文占書フルテキストデータベース：
http://www.temmon.org/

６．研究組織
(1)研究代表者
前原　あやの（MAEHARA, Ayano）
関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員
研究者番号：60734241

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：